

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：22501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19578

研究課題名（和文）妊娠初期検診に前がん病変と診断された女性の産後の受診行動を支える看護モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Support Model to Facilitate Postnatal Care Behaviors of Women Diagnosed with Precancerous Lesions during Early Pregnancy Checkups

研究代表者

大塚 知子（OTSUKA, TOMOKO）

千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師

研究者番号：60737378

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、妊娠初期健診にて子宮頸部前がん病変と診断された女性の産後の受診行動を支える看護モデルを構築することである。子宮頸がんはHPV感染が罹患原因の一つであることから、スティグマを生じさせる。スティグマは受診行動の妨げや孤立を生じさせる。特に、孤立しやすい産後の女性を支援する上では、スティグマをコーピングするための支援が求められる。そこで、本研究では、子宮頸部前がん病変と診断された女性のスティグマ体験を概念化し、受診行動を支える看護モデルの基盤とした。課題研究1では看護モデル（原案）を作成し、課題研究2では専門職者による内容妥当性の評価を行った。それらの結果を基に看護モデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前がん病変と診断された女性の産後の受診行動を支援する看護支援モデルの開発により、子宮頸がんの早期発見、早期治療に向けた支援になるだけでなく、産後の母子の健康を促進するための新たな支援方法の構築となる。本研究は、HPVによる子宮頸がん診断に伴うスティグマの影響を明らかにすることで、社会的な意義を示した。スティグマは、個人の健康行動に対する障壁となり得るため、それを低減する支援は重要である。本研究により、社会的な偏見や誤解に対する教育や啓発活動への示唆となる。新たな看護支援モデルの開発と、社会的な偏見や誤解に対する啓発活動の促進という両面から、学術的および社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a nursing model to support the postnatal healthcare-seeking behavior of women diagnosed with cervical precancerous lesions during early pregnancy screening. Cervical cancer, often caused by HPV infection, is associated with stigma. This stigma can hinder healthcare-seeking behavior and lead to social isolation. Support to cope with stigma is particularly needed for postpartum women who are prone to isolation. Therefore, this study conceptualized the stigma experiences of women diagnosed with cervical precancerous lesions and used this conceptualization as the foundation for a nursing model to support healthcare-seeking behavior.

In the first phase of the study, a draft nursing model was developed. In the second phase, the content validity of the model was evaluated by professionals. Based on these results, a comprehensive nursing model was established.

研究分野：臨床看護

キーワード：子宮頸がん 異形成 看護支援 産後 受診行動 スティグマ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

子宮頸がんは、human papilloma virus (以下 HPV)の持続感染が原因であり、発がん性の HPV は女性の約 80%が一生涯に一度は感染する(植田 et al., 2007)と言われており、すべての女性が HPV に感染し子宮頸がん罹患する可能性がある(植田 et al., 2011)。特に、20 歳代、30 歳代で最も発生率の高いがんであり、妊娠・出産を望む女性のライフサイクルに影響を与える疾患である。子宮頸がんは子宮頸部細胞診にて上皮内腫瘍(CIN ; cervical intraepithelial neoplasia)という前がん病変を発見することができる。一般的にがん検診の目的は、がんの早期発見・治療による死亡率の減少である。しかし、子宮頸がん検診は、前がん病変を早期に排除し子宮温存治療を行い、妊孕性を保つことも重要な目的である。しかし、2013 年のがん検診の受診率は、欧米の検診受診率が 80%以上であるのに対し、わが国の子宮頸がん検診の受診率は 37.7%と低い現状である。子宮頸がんのうち約 1/3 は生殖可能年齢に発症し、1,000 ~ 5,000 妊娠に 1 例の割合で妊娠中に診断される (Hunter.et al,2008)。初期検診にて約 1%の妊婦に子宮頸部細胞診異常が認められると報告(伊藤,2014)されているが、大規模な疫学調査はなされていない。しかし、20 歳・30 歳代における子宮頸がん罹患数の増加と出産年齢の上昇から、今後ますます妊娠初期健診にて前がん病変と診断される女性は増加すると推察される。

子宮頸がん検診に関する研究は、検診の受診率向上に向けた取り組み(野村ら,2014)や検診に対する意識調査(岩崎ら,2013)がなされているが、前がん病変と診断された女性の継続した受診に焦点を当てた研究や産後の女性の受診行動に着目した研究はない。子宮頸がんの予防や早期発見、妊孕性温存という観点からは、検診の受診率向上を目指すだけでなく、前がん病変と診断された女性の継続した受診行動を支える必要がある。しかし、子宮頸がんは性交渉が罹患原因の一つであることから、スティグマを生じさせる危険がある。スティグマは、孤立を引き起こし、受診を遅らせ、症状を悪化させる(横山ら,2013 ; 山田,2015)。加えて、生後 1 歳未満の子どもをもつ女性は、寝込みたいほどの身体不調を過半数が経験(関島,2012)し、産後うつ病の頻度は約 10%にもものぼる(Kitamuraら,2006)。さらに、うつ得点の高い女性は「夫へのサポート希求」「夫以外の知り合いへのサポート希求」が有意に低い(日下部,2018)。そのような状況の中で、自らの子宮頸がん予防を意識し、継続して受診するためには家族や医療者からのサポートが不可欠であると考えられる。

2. 研究の目的

妊娠初期健診にて子宮頸部前がん病変と診断された女性がスティグマをコーピングし、産後の継続した受診行動を支える看護モデルを構築する。本研究では 3 つの課題研究を実施した。

課題研究 1 : 看護モデル(原案)の作成

課題研究 2 : 看護モデル(原案)の内容妥当性の評価

課題研究 3 : 看護モデルの作成

3. 研究の方法

【課題研究 1】

子宮頸部前がん病変と診断された女性に対する面接調査(研究 1-1)およびがん患者、HPV 感染者のスティグマ体験と看護支援に関するスコーピングレビュー(研究 1-2)を実施し、スティグマ体験の概念化を行い、看護支援の内容を明確化し、看護モデルを(原案)を作成した。

【課題研究 2】

看護モデル(原案)の内容妥当性を評価するため、子宮頸部前がん病変と診断された女性、医療従事者へ質問紙調査、面接調査を実施し内容妥当性の評価を行った。

【課題研究 3】

内容妥当性の評価でえられた結果および先行研究から看護モデルを作成した。

4. 研究成果

1)【課題研究 1】

(1) 研究 1 - 1 : 子宮頸部前がん病変と診断された女性のスティグマ体験

子宮頸部前がん病変と診断された女性 14 名に面接調査を実施した。平均年齢 35 歳(28 ~ 42 歳)であり、全対象者に HPV 感染が認められた。

子宮頸部前がん病変と診断された女性が経験したスティグマは 48 のコードから、「偏った性交渉へのレッテル」「がん患者という同情的な視線」「過去の行いに対する後悔の念」「不確かな心配事に対する自責の念」の 4 つのコアカテゴリーに集約された。

スティグマの経験による他者との関係や生活への影響は 84 のコードから、「子宮頸がんに対する偏見の予期」「パートナーとの関係維持における障壁」「自己開示の躊躇による受診行動の妨げ」「今後の人生への脅威」「否定的体験から他者貢献への転換」の 5 つのコアカテゴリーに集約された。

(2) 研究1-2: がん患者および HPV 感染者のスティグマ体験に関するスコーピングレビュー
 がん患者および HPV 感染者のスティグマ体験と看護支援という広範な知見を得るという目的に沿って、文献検索のデータベースとして、PubMed、CINAHL、PsycINFO、MEDLINE、医学中央雑誌 web 版 (以下、医中誌) を用いた。文献検索は 2021 年 9 月 1 日に実施した。設定して PCC に従い、選択基準、評価基準を設けた。

その結果、23 文献を質的統合に採用した。

23 文献のうち、肺がん患者を対象と下研究が 7 件、婦人科系のがん患者を対象とした研究が 5 件、乳がん患者を対象とした研究は 3 件だった。

Hamann ら (2014) の肺がん患者のスティグマ概念モデルを参考に、スティグマプロセスのモデレーター、スティグマ体験、結果 (他者との関係や生活への影響) に分類した。

(3) 看護モデル (原案) の作成

研究 1-1 および 1-2 から、子宮頸部前がん病変と診断された女性の体験するスティグマの概念モデルを作成するとともに、看護目標、看護姿勢の明確化、看護支援の概要を検討した。また、統一した支援を行うための質問紙および看護支援ガイドを作成した。

2) 【課題研究 2】

子宮頸部前がん病変と診断された女性 2 名、医療従事者 (産婦人科医師 1 名、看護師 6 名、がん看護専門看護師 1 名、精神看護専門看護師 1 名) に質問紙調査および面接調査を実施した。

看護師は現在、産婦人科外来で勤務しており、子宮頸部異形成と診断された女性の診療に携わっている。看護師経験は 10 年から 17 年 (平均 12.5 年) であり、外来勤務経験は 1 年から 13 年 (平均 5.8 年) であった。異形成と診断され定期受診している女性は、診断後平均 2.75 年であった。どちらも既婚者であり、子どもが 1 人いた。

(1) 質問紙の内容妥当性の評価

子宮頸部前がん病変と診断された女性のスティグマ体験をアセスメントするための質問紙は質問紙 (モデレーターに関する 26 項目) と質問紙 (スティグマ体験に関する 23 項目) で構成され、重要性、関連性、明確性を 4 段階リッカート尺度で調査した。

質問紙 : 重要性で 3.2 点未満の項目は「閉経の有無」を問う項目が 3.09 点であった。

関連性で 3.2 点未満の項目は、「閉経の有無」が 3.09 点、「上司や同僚に受診の有無を伝える」が 3.18 点であった。明確性は 3.2 点未満の項目はなかった。

質問紙 : 重要性、関連性で 3.2 点未満の項目はなかった。明確性は「汚れた存在であるという認識」が低かった。

(2) 看護支援モデル (原案) の内容妥当性の評価

子宮頸部前がん病変と診断された女性の体験するスティグマの概念、対象者、看護支援の場と方法、看護実践の内容と支援ガイドについて概ね高い評価を得た。

3) 【課題研究 3】

課題研究 2 の結果を基に、妊娠初期健診にて子宮頸部前がん病変と診断された女性がスティグマをコーピングし、継続した受診行動を支える看護モデルの作成を行った。

(1) 子宮頸部前がん病変と診断された女性のスティグマプロセス

課題研究 1 で作成し、課題研究 2 で専門家からの内容妥当性の評価を受け修正した概念モデルを図 1 として示す。

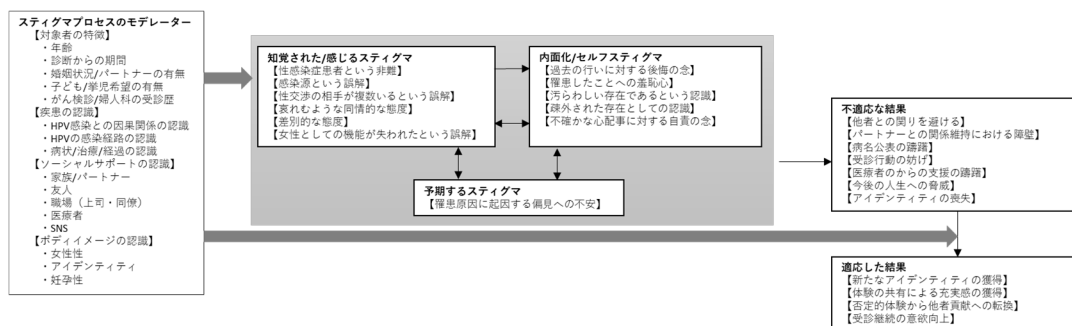


図1. 子宮頸部前がん病変と診断された女性の体験するスティグマプロセス

(2) 看護モデル(修正版)

課題研究1で作成し、課題研究2にて専門家からの内容妥当性の評価を受け、妊娠初期健診にて子宮頸部前がん病変と診断された女性が体験するスティグマをコーピングし、産後の継続した受診行動を支える看護モデルを図2に示す。

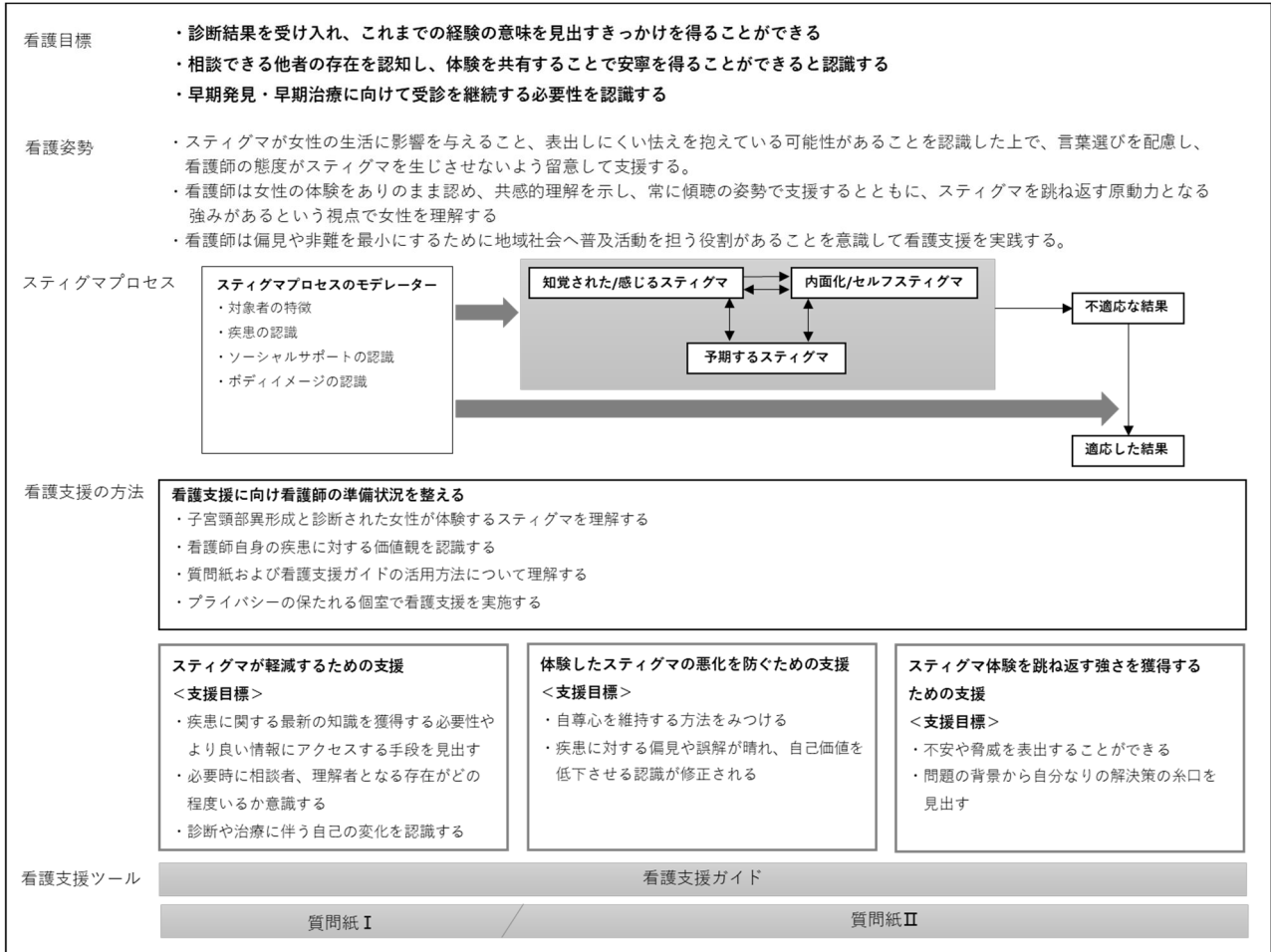


図2.妊娠初期健診にて子宮頸部前がん病変と診断された女性がスティグマをコーピングし、産後の継続した受診を支える看護モデル

< 引用文献 >

- 植田, 政., 田路, 英., 布引, 治., 明石, 京., 出馬, 晋., 鳥居, 貴., 田中, 一., 岡本, 吉., & 野田, 定. (2011). 【これだけは知っておきたい子宮頸癌の診断・治療と予防】 子宮頸癌検診の現状と展望 [解説/特集]. *産婦人科治療*, 102(6), 910-916.
- 植田, 政., 田路, 英., & 野田, 定. (2007). 【子宮頸部の病変とその対策】 子宮頸部異形成の診断と治療 [解説/特集]. *産婦人科治療*, 95(3), 237-243.
- Hunter MD., Bradley J., Krishnansu S. (2008). Cervical neoplasia in pregnancy. Part 1: screening and management of preinvasive disease. *American Journal of Obstetrics and Gynecology*. Vol. 99, 3-9.
- 野村, 幸., 池田, 晶., 中村, 和., 松本, 隆., 原, 信., (2014). 子宮頸がん検診における無料クーポン券の効果と今後の課題について. *予防医学ジャーナル*, 477, 38-42.
- 岩崎, 和., 齋藤, 益., 木村, 好., (2013). 子宮頸がん検診率に影響を与える女性の意識. *女性心身医学*. 18(2), 225-233.
- 横山, 和., 児玉, 壮., 森元, 隆., 竹田, 里., & 池田, 望. (2013). 地域で生活する精神障害者におけるセルフスティグマの形成と対処プロセスに関する質的研究 [原著論文]. *作業療法*, 32(5), 419-429.
- 山田, 光. (2015). 統合失調症患者のセルフスティグマが自尊感情に与える影響 [原著論文]. *日本看護研究学会雑誌*, 38(1), 85-91.
- 関島, 香., (2012). 子育て期早期にある女性の身体的健康. *母性衛生*, 53(2), 375-382.
- 日下部, 典., (2018). 妊婦を対象としたうつ状態とコーピング、援助志向性の関係. *女性心身医学*. 22(3), 278-284

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大塚知子、眞嶋朋子	4. 巻 26
2. 論文標題 子宮頸部前がん病変と診断された女性のスティグマ体験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉看護学会誌	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13448846-26-1-P79	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tomoko Otsuka, Tomoko Majima
2. 発表標題 Conceptual Model of Stigma among Women Diagnosed with a Pre-cancerous Cervical Lesion
3. 学会等名 the7th International Nursing Research Conferance of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	眞嶋 朋子 (MAJIMA TOMOKO)	千葉大学大学院看護学研究科 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------